

学力保障をめざすカリキュラム設計の理論としての 「逆向き設計」論とそれに基づく中学校教育実践事例の検討

—北原琢也編著『「特色ある学校づくり」とカリキュラム・マネジメント』を読む—

助 川 晃 洋

The Theory and Practices of “Backward Design” :
“The Creation of Schools with Character” and Curriculum Management

Akihiro SUKEGAWA

I 本稿の性格

本稿(のと)は、宮崎大学大学院教育学研究科専門職学位課程教職実践開発専攻の共通必修科目として、2009年度後期に開講された「学校改善とカリキュラムマネジメント」の初回講義時に、授業担当者(筆者)が受講生に配付した資料をそのまま掲載したものである。

上記授業科目に関する形式的な基本情報としては、次の事項を追加しておきたい。

授業担当者：本学准教授で研究者教員の筆者(修士課程専任教員との兼務)と本学客員教授で実務家教員の白川智先生(専任)の計2名が、2008年度から昼(火曜日3・4限、10:30-12:00)・夜(火曜日1・2限、18:20-19:50)ともに共同・協働で担当している。分担はしておらず、いわゆるオムニバス形式は採用していない。

カリキュラム上の位置づけ：各コース共通必修領域の一つである「教育課程の編成・実施に関する領域」に属する必修2科目のうちの一つに該当する。ちなみにもう一つの必修科目は、「子どもの学びと教育課程経営」である(授業担当者は異なる)。

配当学年・学期：1年次後期。言うまでもなく全員が登録・履修しなければならない。

単位：合格した者には2単位を認定する。

教職大学院の授業のあり方については、それが発足して間もないこともあり、安定的・定型的なもの開発や優れた先例と呼べるものの紹介等が全くと言ってよいほど行われてきておらず、大学院段階の教員養成の現場では、各授業担当者が、まさに手探りの状態で努力が続いている。そこでたとえ拙劣なものではあっても、高度専門職業人養成として教員養成(本学の場合で言えば、「学校教育に関する高度の学識及び実践力・応用力を備えた新人教員やミドルリーダー(中堅教員)及びスクールリーダー(中核的中堅教員)」の「育成」。教職実践開発専攻のHPより)に特化した専門職大学院という制度の趣旨と昨今の教師教育改革動向を踏まえて、事例研究に徹しながら、理論と実践の往還・融合を実現すべく考案した自らの授業構想を一つのたたき台として差し出すことには、多少なりとも意義が認められるはずである。もちろん公開することで、何らかのリスクが発生しはしないかと憂慮しており、それを躊躇してしまう

気持ちもあるにはある。それでもちっけな勇を奮って開き直りの筆を執ることにした。関係する各方面の方々には、予めご寛容を乞うとともに、率直な、そして建設的なご意見・感想やご批判を頂戴することができれば幸いである。

とはいえ、本稿の中心的な内容は、あくまでも上記授業科目の初回講義資料である。は、その背景も含めて主たる授業対象設定の理由について述べたものであり、その内容自体が、同時に導入教材となるようにも配慮してある。は、授業で使用されるテキスト（後述）の選定結果とその概要を示すのに加えて、それに関連する内外の参考文献を挙げており、授業以外の場での受講生の発展的な学習・研究に便宜を図ろうとするものである。これらは、いずれも筆者が原案作成し、授業担当者間で推敲を重ね、その後決定稿として仕上げたものである。そのため本稿は、実際の授業の全貌はもちろん、例えばレポートの内容やそれに基づいて展開される討論のライブ感を伝えることは意図していない。大学授業研究の方法の習得については、今後の課題とし、詳細な実践報告は、後日稿を改めて行うことにしたい。また上述したものに加えて、シラバス及びオリエンテーション資料を作成し、初回講義時に配付した上で、さらに口頭で補足することによって、詳細な授業計画を受講生に伝達している。しかしこれらについては、シラバスがすでにインターネット上で公開済みであること、いずれも極めて事務的な書類であることに鑑み、本稿においては省略した。したがって初回講義資料のすべてが、本稿に収められているわけではない。なお本稿の表題及び副題については、それらが本稿の直接的な叙述内容それ自体を表しているというよりも、授業の中心的な作業課題がそこに置かれているという程度に理解していただきたい。

II 学力保障という立場と「逆向き設計」論への着目

1980・90年代の我が国においては、様々な教育問題が噴出する中で、「学力」のとらえ直しが行われた。教育政策のレベルでは、学習指導要領（1989年）と指導要録（1991年）の改訂を主要な契機として、いわゆる「新しい学力観」（「新学習指導要領が目指す学力観」）が提唱され、「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成」、「関心・意欲・態度」を重視する方針が打ち出された。また教育学界においては、学力という概念、或いは観念そのものへの批判が提起されることとなった。例えば「学校を問うパースペクティブ - 学びの共同体へ」（1992年初出）において佐藤学は、「国家主義の学校」、「産業主義の学校」のそれぞれが、「国民意識を統合する共通の知識と道徳を規定した『公的枠組み』」、「人的資源を開発する『教育計画』」とみなしてきた伝統的なカリキュラム概念理解を批判的に問い直し、「革新主義の学校」が創出してきた「『学習経験』としてのカリキュラム」概念に込められた意味合いを踏まえて（この意味におけるカリキュラムは、その語義にちなんで「学びの履歴書」と言ってもよい）、一つの新たな立場を設定・提示するに至っている⁽¹⁾。次の通りである⁽²⁾。

教育の価値を、学習に前もって準備される教材の内容や、学習の結果として測定される学力ではなく、学習活動それ自体の経験の価値に求める立場である。すなわち、何が教えられるか、どれだけ達成されるかではなく、その学習活動が、文化的社会的に価値ある経験であるかどうか、その経験が、その子どもが形成している社会や文化との意味関連を豊かに発展させるものであるかが問われるのである。

さらに「学校を問うパースペクティブ - 学びの共同体へ」において佐藤は、引き続き次のよ

うに述べている⁽³⁾。

革新的な学校を創造するためには、「教授学校」を「学習学校」に置き換えるだけでは不十分である。学習の経験の質それ自体が、吟味され改造されなければならない。「学習」とは、どのような営みなのか、学校に組織される「学習経験」は、社会で提供されている「学習経験」とどう違うべきなのか、その「学習経験」の組織を通して、学校は、子どもたちにどのような成長と発達を保障し、社会や文化の発展にどう貢献できるのか。それら一連の問いが、カリキュラム領域の問題にならなければならない。

それまでの教育学や心理学では、学習は、ある個人が所定の知識や技能を獲得し、それによって特定の能力を発達させたり、特定の行動を変化させることを意味していた。しかし実際のところ、学習は、複雑な文脈を基礎として展開される文化的・社会的実践であり、教室では、教育学や心理学の限られた言語では到底語り尽くせない複雑な諸価値が実現したり、喪失したりしているはずである。カリキュラムを「学習経験」の総体として理解することは、教室のミクロな事象として生起する学習を、マクロな社会や文化の広がりにおいてとらえ直す契機を準備していると言ってよいだろう。佐藤の提言は、当時としてはもちろんのこと、今日の教育状況に照らしてみても、まさに正鵠を得たものであり、筆者としても大いに頷かされる。

ところが2002年1月17日になって文部科学省・遠山敦子文部科学大臣（当時）が、「確かな学力の向上のための2002アピール『学びのすすめ』」（と別紙「確かな学力の向上のための具体的方策～新しい学習指導要領の全面実施に際して～」）を急遽発表したことで、状況は一変することになる。そこでは「新しい学習指導要領（1998年版・引用者注）のねらいとする『確かな学力』の向上のために、指導に当たっての重点等を明らかにした5つの方策」が列挙された。次の通りである。

1 きめ細かな指導で、基礎・基本や自ら学び自ら考える力を身に付ける

少人数授業・習熟度別指導など、個に応じたきめ細かな指導の実施を推進し、基礎・基本の確実な定着や自ら学び自ら考える力の育成を図る

2 発展的な学習で、一人一人の個性等に応じて子どもの力をより伸ばす

学習指導要領は最低基準であり、理解の進んでいる子どもは、発展的な学習でより力を伸ばす

3 学ぶことの楽しさを体験させ、学習意欲を高める

総合的な学習の時間などを通じ、子どもたちが学ぶ楽しさを実感できる学校づくりを進め、将来、子どもたちが新たな課題に創造的に取り組む力と意欲を身に付ける

4 学びの機会を充実し、学ぶ習慣を身に付ける

放課後の時間などを活用した補足的な学習や朝の読書などを推奨・支援するとともに、適切な宿題や課題など家庭における学習の充実を図ることにより、子どもたちが学ぶ習慣を身に付ける

5 確かな学力の向上のための特色ある学校づくりを推進する

学力向上フロンティア事業などにより、確かな学力の向上のための特色ある学校づくりを推進し、その成果を適切に評価する

そして上記緊急「アピール」以後の教育政策は、「確かな学力」の育成を重視する方向へと明らかに転換することになる。そうした中で、「陰山方式」と呼ばれる百ます計算や漢字ドリ

ルのような反復練習の流行に代表される旧来型の「暗記」学力（低次の基礎技能、量とスピード）を重視する動きが、全国の学校現場に、そして家庭をはじめとする学校以外の学習の場に急速に広まった。さらに2007年4月に全国学力・学習状況調査という形で、事実上の全国一斉学力テスト（学テ）が43年ぶりに「復活」したことを受けて、いわゆるテスト対策の取り組み、とりわけB問題（主として「活用」を問うもので、「知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などにかかわる内容を中心とした出題」。それに対してA問題は、主として「知識」を問うもので、「身につけておかなければ後の学年党の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能などを中心とした出題」）対応のそれが盛んに行われるようになったことも指摘されている⁽⁴⁾。

また2009年の上記学力調査実施前に、「熊本県教委菊池教育事務所（菊池市）の所長が、『1年に1回の学力の全国大会。学校の名誉と誇りにかけて頑張ってもらいたい』と記した文書を管内の小中学校45校にファクスで送っていた」事例や調査実施後に、「山口県周南市教委が子どもたちの『解答状況』を文科省の結果通知前に把握することを求め、少なくとも小学校1校が」、「校内で独自に採点するため」に「全員の答案用紙をコピーした」事例等が、同年4月22日の朝日新聞紙上で報告されており、学力調査をめぐる状況は、いささか過熱気味の様相を呈していると言わざるを得ない。

では、こうした状況を踏まえて我々は、学校教育の改善を進めるために、学力の問題に対してどのような立場を選択するべきであろうか。この問いに対する厳密な意味での統一的な回答を提示することは、おそらくは不可能である。論者や実践者のそれぞれによって見解が異なり、したがって特定のもので合意することは極めて困難であると予想され得るからである。しかしいずれにせよ、学力という概念を放棄するのではなく、再度、それも相当の決意を持って、学力保障を重視する立場に立つことこそが必要であるとだけは、筆者は強く主張したい。1999年に「分数ができない大学生」⁽⁵⁾というセンセーショナルな問題提起から始まった学力低下論争の中で疑問視され、国際学習到達度調査PISA（Programme for International Student Assessment）や国際数学・理科教育動向調査TIMSS（Trends in International Mathematics and Science Study）によって裏づけられた我が国の子どもの学力の低落傾向が、格差、意欲、生活の環境と習慣等の問題とも密接に関連しながら、現在も深刻な形で進行中であり、またそれに対応して2008年3月に改訂された学習指導要領が、各教科、とりわけ国語、社会、算数・数学、理科、外国語等の内容と授業時数を増加させることで、脱「ゆとり教育」と学力向上の姿勢を明確に打ち出している以上、我々教育関係者、とりわけ公教育の担い手としての教師が学力問題から多少なりとも目をそらすことは、個人的に抱いている教育観・学力観、或いは思想・信条がたとえどうであれ、もはや決して許されないことだからである。

ただしこのような立場を選択するに際しても、上述した佐藤の提言をはじめとして、1980・90年代に提起された様々な疑問や批判等に加えて、昨今の各方面での議論の動向と調査・研究によって得られた科学的知見及び実践の成果をしっかりと踏まえることによって、学力概念を再定義することが求められるはずである。新学習指導要領もまた、第1章「総則」の冒頭において次のように述べることで（小学校の場合）、基礎学力と高次（higher-order）の学力の両方を子どもに身に付けさせることを求めているからである。

学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、児童に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。

そして学力保障をめざす今後の教育のあり方、とりわけカリキュラム設計に展望を与える理論としては、「逆向き設計」(backward design)論が非常に有力であり、それに基づく実践事例は、入念な検討に値するものであると筆者は考える。「逆向き設計」論は、カリキュラムにパフォーマンス課題、すなわちリアルな文脈の中で知識やスキルを応用・総合しつつ使いこなすことを求める学習課題を適切に位置づける指針を与える理論であり、ウィギンズ(Grant Wiggins)とマクタイ(Jay McTighe)が、共著書『理解をもたらすカリキュラム設計』(Understanding by Design)において提案しているカリキュラム設計、或いはカリキュラム編成の理論である。その最大の特徴は、単元や個々の授業の設計(ミクロの設計)を行う際、また年間指導計画や教育課程全体の設計(マクロの設計)を行う際に、「求められている結果を明確にする」(Identify desired results)、その結果がもたらされたこと「承認することができる証拠を決定する」(Determine acceptable evidence)、その上で、そのような証拠が生み出されるような「学習経験と指導を計画する」(Plan learning experiences and instruction)というように、目標・評価方法・授業の進め方の「三つのステージ」を一貫性のあるものとして三位一体的に考えることで、まさに「指導と評価の一体化」、すなわち評価の改善による学力形成を実現する点に認められる⁽⁶⁾。教育によって最終的にもたらされる結果から遡って教育を設計することを主張している点、そして指導が行われた後で考えられがちな評価方法を先に構想している点、以上二つの理由により、「逆向き」と呼ばれている。

「逆向き設計」論が提唱された背景には、1980年代後半のアメリカで、学力の「真正性」(authenticity)を重視する立場として登場した「真正の評価」(authentic assessment)論の存在がある。ウィギンズとマクタイは、アーチボールド(Doug A. Archbald)やニューマン(Fred M. Newmann)等と並んで⁽⁷⁾、その代表的な論者であった。「真正の評価」論は、「大人が仕事の場や市民生活の場、個人的な生活の場で『試されている』("tested")、その文脈を模写したり、シミュレーションしたり」⁽⁸⁾しつつ評価を行うことを主張するものである。この理論の登場に伴い、「パフォーマンスに基づく評価」(performance-based assessment)の方法が様々に開発された。「逆向き設計」論もまた、その一つであり、「真正の評価」論に基づき、幅広い評価方法をカリキュラムに位置づける展望を開くものである。そして「逆向き設計」論は、「生きる力」を理念として掲げ、「習得・活用・探究」、「言語活動」、「リテラシー」等をキーワードとする新学習指導要領の趣旨を生かしつつ、知識やスキルを活用し、課題を探究する力(PISA型学力)を含む総合的な学力を子どもに育成することをめざして、授業や教育課程・カリキュラムはもちろんのこと、学校教育全体の改善を志向した取り組みを進める際にも、有益な示唆を与えるものとして期待される。

Ⅲ テキストの選定と「逆向き設計」論に関する主要参考文献リスト

以上の考えに基づいて、本授業においては、次の書物（以下、テキストと称する）に示された「逆向き設計」の理論と実践を俎上に載せることにする。

編著者：北原琢也（京都市立衣笠中学校校長、当時）
 書名：『「特色ある学校づくり」とカリキュラム・マネジメント 京都市立衣笠中学校の教育改革』
 出版社：三学出版（滋賀県大津市）
 出版年：2006年
 定価：本体2000円＋税
 ISBN：4-903520-06-4

テキストの基本的な構成は、次の通りである。

- 序章 「特色ある学校づくり」における校長の役割
- 第1章 教育評価改革のはじまり
- 第2章 「逆向き設計」論にもとづくカリキュラム改革
- 第3章 自分の体験を通して表現力を伸ばす
 - 英語科のパフォーマンス課題とルーブリック -
- 第4章 「逆向き設計」論による指導案の作成とパフォーマンス評価
 - 理科における単元づくり -
- 第5章 「総合的な学習の時間」の取り組み
- 第6章 時間割の改革
- 終章 カリキュラム・マネジメントのプロセス

そしてテキストの「まえがき」において北原は、次のように述べている⁽⁹⁾。

本書は、(中略)ごく普通の公立中学校で、編者が校長として4年間、実践した実績を記したものです。

序章では、「特色ある学校づくり」における校長の役割として、第1節「私の学校経営」、第2節「研究開発の効果的な運営」、第3節「研究指定校と学校経営」において、グランドビジョン（全体構想）、ストラテジー（方略）、タクティクス（具体的方策）、実践事例を述べています。

第1章は、衣笠中の教育評価改革のはじまりとして、第1節「評価に関する基本的な内容の共通理解」、第2節「単元における『評価規準』づくり」、第3節「年間指導計画に沿った年間評価計画の作成」、第4節「通知表の改善」について紹介しています。

第2章は、「逆向き設計」論にもとづくカリキュラム改革と題し、「逆向き設計」論との出会い、すなわち、西岡加名恵先生（京都大学大学院教育学研究科助教授）との共同研究の経緯として、第1節「『逆向き設計』論との出会い」、第2節「『逆向き設計』論にもとづく単元設計」、第3節「学習指導案検討の実際」、第4節「成果と課題」を詳しく述べてあります。

第3章、第4章は、衣笠中の英語科森千映子教諭と理科井上典子教諭が、「目標・内容分析」のカリキュラム設計に、「逆向き設計」論を取り入れた実践事例を示したものです。

その内容は、単元構想、パフォーマンス課題、ルーブリックづくりまでについて考え方と実践の感想を述べたものです。

第5章は、衣笠中の「総合的な学習の時間」の取り組みとして、第1節「共通理解を図る」、第2節「『きぬかけのみち』の全体カリキュラム」、第3節「『総合的な学習の時間』の評価」について紹介しています。

第6章は、衣笠中の時間割の改革として、第1節「『特色ある教育活動』『特色ある学校づくり』」、第2節「授業時間の弾力化」、第3節「衣笠中の時間割」を詳しく述べてあります。

終章は、カリキュラム・マネジメントのプロセスとして、第1節「衣笠中のカリキュラム（教育課程）編成の共通理解」、第2節「各年度における課題設定」をまとめました。

本書は、日本全国どこにでも存在する、ごく普通の公立中学校の、教育評価の実践研究としての「評価規準」づくりから、授業改革へ、そして、カリキュラム設計・カリキュラム評価へ、最終的には、カリキュラム（教育課程）改革をめざした取組の一端を示したものです。

本書が、各学校におけるカリキュラム・マネジメントの改善に向けた取り組みに広く活用されれば幸いです。

以上の「目次」と「まえがき」の一部を見るだけで明らかなように、テキストでは、「逆向き設計」の理論と実践についてのみならず、「特色ある学校づくり」とカリキュラムマネジメントにかかわる様々な事項についても言及されている。「逆向き設計」の理論と実践に関する検討を基軸としながら、それらについても、もちろん順次検討していくことにする。衣笠中学校の「実践」は、学校改善とカリキュラムマネジメントという視点から見た場合、「多くの学校が学ぶべきモデルとして」の意義を持ち合わせているものであると考えられるからである（西岡加名恵「本書を推薦します」より）。

また「逆向き設計」論に関する参考文献は、次の通りである。現時点までに筆者が入手・読了し得たうちで、主要なものだけを挙げておくことにする（ただ一つ、ウィギンズの学位論文については未入手・未読であるが、参考までに挙げておくことにした）。したがって以下のリストは、書誌情報として不完全であり、関連する文献をさらに渉猟することによって、今後において一層の充実が図られる必要がある。なおテキストについては除外した。

< 邦語文献 >

安藤輝次 「総合学習のカリキュラム論」 加藤幸次・安藤輝次著 『総合学習のためのポートフォリオ評価』 黎明書房 1999年

石井英真 「『改訂版タクソノミー』における教育目標・評価論に関する一考察 - パフォーマンス評価の位置づけを中心に -」 『京都大学大学院教育学研究科紀要』第50号 京都大学大学院教育学研究科 2004年3月 pp. 172-185.

石井英真・田中耕治 「米国における教育評価研究の動向 - 『真正の評価』論の展開を中心に」 田中耕治編著 『教育評価の未来を拓く 目標に準拠した評価の現状・課題・展望』 ミネルヴァ書房 2003年 pp. 200-217.

遠藤貴広 「G. ウィギンズの教育評価論における『真正性』概念 - 『真正の評価』論に対する批判を踏まえて -」 『教育目標・評価学会紀要』第13号 教育目標・評価学会 2003年10月 pp. 34-43.

- 遠藤貴広 「G. ウィギンズのカリキュラム論における『真正の評価』論と『逆向き設計』論の連関」 『京都大学大学院教育学研究科紀要』第51号 京都大学大学院教育学研究科 2005年3月 pp. 262-274.
- 遠藤貴広 「G. ウィギンズの『看破』学習 - 1980年代後半のエッセンシャル・スクール連盟における『本質的な問い』を踏まえて -」 日本教育方法学会紀要『教育方法学研究』第30巻 日本教育方法学会 2005年3月 pp. 47-58.
- 遠藤貴広 「米国エッセンシャル・スクール連盟における『逆向き計画』による学校改革 - セイヤー中・高等学校の実践を例に -」 『京都大学大学院教育学研究科紀要』第53号 京都大学大学院教育学研究科 2007年3月 pp. 220-232.
- 遠藤貴広 「米国エッセンシャル・スクール連盟の学校改革における『真正の評価』の役割 - ホジソン職業技術高校の卒業プロジェクトを事例に -」 『福井大学教育地域科学部紀要』第部(教育科学)第64号 福井大学教育地域科学部 2009年3月 pp. 1-12.
- 岡田泰・土佐岡智子・大松恭宏・松浦武人・上田敦三 「算数科における観察・洞察力の育成を意図した学習指導と評価に関する実証的研究」 『学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第36号 広島大学学部・附属学校共同研究機構 2008年3月 pp. 201-210.
- 岡田泰・土佐岡智子・大松恭宏・上田敦三・松浦武人 「算数科における観察・洞察力の育成を意図した学習指導と評価に関する実証的研究」 『学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第37号 広島大学学部・附属学校共同研究機構 2009年3月 pp. 115-120.
- キャロライン・V. ギップス著 鈴木秀幸訳 『新しい評価を求めて - テスト教育の終焉』 論創社 2001年
- 田中耕治 『指導要録の改訂と学力問題 学力評価論の直面する課題』 三学出版 2002年
- 田中耕治 「PISA型読解力はどのように位置づけられるべきか」 日本教育方法学会編 『現代カリキュラム研究と教育方法学 - 新学習指導要領・PISA型学力を問う -』 図書文化 2008年 pp. 56-68.
- 田中耕治・西岡加名恵編集 『「学力向上」実践レポート 実践の成果と舞台裏』 教育開発研究所 2008年
- 田中耕治・水原克敏・三石初雄・西岡加名恵著 『新しい時代の教育課程(改訂版)』 有斐閣 2009年
- 西岡加名恵 「教育評価の方法 - 『筆記による評価』から『パフォーマンスにもとづく評価』まで -」 田中耕治編著 『新しい教育評価の理論と方法』第巻・理論編 日本標準 2002年 pp. 33-97.
- 西岡加名恵著 『教科と総合に活かすポートフォリオ評価法 新たな評価基準の創出に向けて』 図書文化 2003年
- 西岡加名恵 「ウィギンズとマクタイによる『逆向き設計』論の意義と課題」 『カリキュラム研究』第14号 日本カリキュラム学会 2005年3月 pp. 15-29.
- 西岡加名恵 「『逆向き設計』論にもとづくカリキュラム編成 - 中学校社会科における開発事例 -」 『教育目標・評価学会紀要』第17号 教育目標・評価学会 2007年11月 pp. 17-24.
- 西岡加名恵編著 『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』⁽¹⁰⁾ 明治図書 2008年
- 西岡加名恵 「学力保障をめざすカリキュラムの設計 - 『逆向き設計』論からの提案 -」

- 『日本教育学会第67回大会研究発表要項』 日本教育学会 2008年8月 pp.132-133.
福本義久 「活用の足場をつくる算数科単元設計の在り方」 教職大学院研究紀要『学校教育実践研究』第1号 奈良教育大学大学院教育学研究科専門職課程教職開発専攻 2009年3月 pp.87-94.
松下佳代 『パフォーマンス評価 - 子どもの思考と表現を評価する - 』 日本標準 2007年
峯明秀 「思考支援型単元プラン作成による授業設計力の育成 - 選択科目『社会科教育実践論』の展開 - 」 『教科教育学論集』第6号 大阪教育大学教科教育学研究会 2007年3月 pp.43-51.
R. ドラン・F. チャン・P. タミル・C. レンハート著 古田光一監訳 鈴木誠・大鹿聖公・池田文人・人見久城訳 『理科の先生のための新しい評価方法入門 高次の学力を育てるパフォーマンス課題、その実例集』 北大路書房 2007年
< 英語文献 >
Abilock, D. (2007, May/June). Choosing Assessments That Matter. Knowledge Quest, 35(5), 8-12.
Brandt, R. (1992, May). On Performance Assessment: A Conversation with Grant Wiggins. Educational Leadership, 49(8), 35-37.
Childre, A. /Sands, J. R. /Pope, S. T. (2009, May/June). Backward Design: Targeting Depth of Understanding for All Learners. TEACHING Exceptional Children, 41(5), 6-14.
Cizek, G. J. (1991, May). Innovation or Enervation?: Performance Assessment in Perspective. Phi Delta Kappan, 72(9), 695-699.
Cizek, G. J. (1991, Oktober). Confusion Effusion: A Rejoinder to Wiggins. Phi Delta Kappan, 73(2), 150-153.
Kelting-Gibson, L. M. (2005, September). Comparison of Curriculum Development Practices. Educational Research Quarterly, 29(1), 26-36.
Lambert, D. /Lines, D. (2000). Understanding Assessment: Purposes, Perceptions, Practice, London: Routledge Falmer.
McTighe, J. (1996, Dezember/1997, January). What Happens Between Assessments?. Educational Leadership, 54(4), 6-12.
McTighe, J. /Lyman, Jr. F. T. (1988, April). Cueing Thinking in the Classroom: The Promise of Theory-Embedded Tools. Educational Leadership, 45(7), 18-24.
McTighe, J. /Thomas, R. S. (2003, February). Backward Design for Forward Action. Educational Leadership, 60(5), 52-55.
McTighe, J. /Wiggins, G. (2004). Understanding by Design: Professional Development Workbook. Alexandria, VA: ASCD. (ASCDは、Association for Supervision and Curriculum Developmentの略称である)
Merrill, C. /Comerford, M. (2004, October). Technology and Mathematics Standards: An Integrated Approach. The Technology Teacher, 64(2), 8-12.
Newmann, F. /Brandt, R. /Wiggins, G. (1998, August/September). An Exchange of Views on "Semantics, Psychometrics, and Assessment Reform: A Close Look

- at ' Authentic ' Assessments". Educational Researcher, 27(6), 19-22.
- Newmann, F. M. /Marks, H. M. /Gamoran, A. (1996, August). Authentic Pedagogy and Student Performance. American Journal of Education, 104(4), 280-312.
- Reeve, E. M. (2002, October). Translating Standards for Technological Literacy into Curriculum. The Technology Teacher, 62(2), 33-36.
- Shumway, S. /Berrett, J. (2004, November). Standards-Based Curriculum Development for Pre-Service and In-Service : A " Partnering " Approach Using Modified Backwards Design. The Technology Teacher, 64(3), 26-29.
- Terwilliger, J. S. (1997, November). Semantics, Psychometrics, and Assessment Reform : A Close Look at " Authentic " Assessments. Educational Researcher, 26(8), 24-27.
- Terwilliger, J. S. (1998, August/September). Rejoinder : Response to Wiggins and Newmann. Educational Researcher, 27(6), 22-23.
- Wiggins, G. (1987). Thoughtfulness as an Educational Aim (Unpublished Dissertation : Harvard University Graduate School of Education).
- Wiggins, G. (1987, Winter). Creating a Thought-Provoking Curriculum : Lessons from Whodunits and Others. American Educator, 11(4), 10-17.
- Wiggins, G. (1988, Winter). Rational Numbers : Toward Grading and Scoring That Help Rather than Harm Learning. American Educator, 12(4), 20-48.
- Wiggins, G. (1989, April). Teaching to the (Authentic) Test. Educational Leadership, 46(7), 41-47.
- Wiggins, G. (1989, May). A True Test : Toward More Authentic and Equitable Assessment. Phi Delta Kappan, 70(9), 703-713.
- Wiggins, G. (1989, November). The Futility of Trying to Teach Everything of Importance. Educational Leadership, 47(3), 44-59.
- Wiggins, G. (1991, February). Standards, Not Standardization : Evoking Quality Student Work. Educational Leadership, 48(5), 18-25.
- Wiggins, G. (1991, May). A Response to Cizek. Phi Delta Kappan, 72(9), 700-703.
- Wiggins, G. (1992, May). Creating Tests Worth Taking. Educational Leadership, 49(8), 26-33.
- Wiggins, G. (1993, November). Assessment : Authenticity, Context, and Validity. Phi Delta Kappan, 75(3), 200-214.
- Wiggins, G. (1996, Dezember/1997, January). Practicing What We Preach in Designing Authentic Assessments. Educational Leadership, 54(4), 18-25.
- Wiggins, G. (1997, September). Work Standards : Why We Need Standards for Instructional and Assessment Design. NASSP Bulletin, 81(590), 56-64. (NASSPは、National Association of Secondary School Principalsの略称である)
- Wiggins, G. (1998). Educative Assessment : Designing Assessments to Inform and Improve Performance. San Francisco, CA : Jossey-Bass.
- Wiggins, G. P. (1999). Assessing Student Performance : Exploring the Purpose and

- Limits of Testing (1st Paperback ed.). San Francisco, CA : Jossey-Bass.
- Wiggins, G./McTighe, J. (1998). Understanding by Design (1st ed.). Alexandria, VA : ASCD.
- Wiggins, G./McTighe, J. (2005). Understanding by Design (Expanded 2nd ed.). Alexandria, VA : ASCD.
- Wiggins, G./McTighe, J. (2007). Schooling by Design : Mission, Action and Achievement. Alexandria, VA : ASCD.

なお「インストラクショナルデザイン」(instructional design) 関係の文献において、「学習者のパフォーマンス評価」について論じた箇所、ウィギンズの教育評価論が参照・引用されている⁽¹¹⁾、「評価規準の開発」に際して考慮すべき「コンテキスト中心基準」について論じた箇所、「テスト項目と評価課題を作成する際にデザイナーは、学習環境、或いはクラス環境と同様に、実際のパフォーマンス環境を考慮しなければならない。テスト項目と課題は、できるだけ実際のパフォーマンス環境に近く現実的で、また真正のもでなければならない。この基準が、学習環境からパフォーマンス環境への知識とスキルの転移を確実にするのを助けるものである⁽¹²⁾」と述べられている、或いは「学習目標の明確化」や「課題分析」について論じた箇所、「逆向き設計」論と同じ発想が紹介されている(「教材を作る前に『テスト』を作る⁽¹³⁾」、「出口からさかのぼって、入り口まで逆行する⁽¹⁴⁾」、「まずはテスト問題をつくってから教え始めよう」、「テスト問題を最初につくってしまうことで成功の基準をはっきりさせよう⁽¹⁵⁾」)というケースをたびたび目にする。 「真正の評価」論と「逆向き設計」論の中に、システムの(工学的)なアプローチとの共通点やその可能性を見出すことができるのかどうか。あえて詳述は避けることにするが、重要な研究課題として指摘だけはしておきたい。またインテルの教育支援プログラムの一貫である「Intel Teachプログラムでの単元プラン(=授業案)の作成は、逆向き設計(Backward Designプロセス)の考え方を取り入れています」、「Intel Teachプログラムでは、逆向き設計の考え方を取り入れた思考支援型の単元プラン作成を行っています(それぞれ『Intel Teachプログラムガイドブック 児童・生徒の力を伸ばす授業開発を学ぶ!』中のp. 4. とp. 5. から引用)、「インテルプログラムは、ウィギンズらの研究成果を踏まえ、プロジェクト学習のテーマや課題として、単元を貫く本質的な問いをつくるように要求しており、単元プランを考える学生自身に、問いをつくることの重要性を理解させるものとなっている⁽¹⁶⁾」ということを付記しておきたい。

IV まとめ

見出しに「まとめ」と銘打ってしまったものの、もとよりこれだけの、そしてこのような論述から、それをうまくまとめることなどできるはずがない。ただし筆者としては、本稿に収めた初回講義資料が、シラバス及びオリエンテーション資料の内容を補完する役割を果たすとともに、授業の中心的な内容へと受講生を円滑に導き入れることに貢献するものであるとだけは、期待を込めて言うことができる。もちろんその改訂は、随時行っていくつもりであるし、それどころか授業内容の抜本的な見直しもまた、近く行わなければならないと感じている。なぜなら教育改革が、急速な勢いで進行しているからであり、またそれはさておくとしても、大学教員の端くれとしては、絶えず授業改善を図っていかなければならないと考えているからである。ル

ター (Martin Luther) と並ぶドイツ宗教改革の中心人物の一人であり、その履歴から「ドイツの教師」(Praeceptor Germanie) と称されるメランヒトン (Philipp Melancthon) が、たとえ当時の社会的混乱のどさくさの最中においてであれ、彼が17歳であった1514年に、学芸修士 (Magister der freien Künste) になると同時にテュービンゲン大学で学生から教師に変身したという歴史上の逸話を例外的なエピソードとするならば、それほど教養と実力と備えた若者が、いまどきいるはずもないだけに、「学生のニーズを踏まえる」、「学生のレベルに合わせる」ということは、彼らに対して必要以上に迎合することでなければ、やはり十分に考慮されるべき条件である。もっとも彼一流の諧謔的な逆説として述べられた「人は子どもというものを知らない」⁽¹⁷⁾ というルソー (Jean-Jacques Rousseau) の有名な言葉をもじって言えば、そもそも「大学教員は学生というものを知らない」わけで、「学生中心の教育」というスローガンとか、彼らの興味・関心に応えようとか、健気にも彼らの神秘をわかつろう、知ろうとかいうことを必要以上に意識することが、結局別の問題を新たに生み出してしまような気がしないわけでもない。

また研究の内容はおろか、その雰囲気だけでさえも伝えにくく、ただわかりやすさばかりが求められている昨今の大学教育界ではあるが、それでもわかっていることばかりを羅列する伝統的なスタイルの講義 (教育学の講義ならば、その分野ごとのクロノロジーが、その代表格であろうか) を行うことは、教授能力の不足どころか、研究の怠慢の反映とさえみなされてしまう危険性を免れることができない。マックス・プランク (Max Planck) は、ベルリン大学でヘルムホルツ (Hermann von Helmholtz) とキルヒホフ (Gustav Robert Kirchhoff) の物理学の講義を聴いて、その熱意のなさや内容の無味乾燥さに退屈し、教師としての彼らに失望した。プレスナー (Helmuth Plessner) は、フライブルク大学で現象学のフッサール (Edmund Husserl) から指導を受けたが、「彼が偉大だったのは思想家、著述家としてだけである」、「講義やゼミナールの教師としてのフッサールからはあまり得るものがなかった」と語っている⁽¹⁸⁾。こうした逸話は、かつての碩学大儒だからこそであって、そのように評価される見込みなどおおよそあり得ない普通の、或いは標準的な地歩にさえ遠く及ばない筆者のような研究者には、到底許されるものではないだろう。

ところでドイツ教育学・教授学を中心に教育方法学を専攻する筆者は、俗物根性的な職業準備教育と学問的教養に対する懐疑こそが、大学思想を危機に陥れる元凶であるとして⁽¹⁹⁾、「現職教育講座」(Fortbildungskursus) について「通俗的」、「そのようなことは、やりたい者に任せておけばよい」⁽²⁰⁾ と述べたシュプランガー (Eduard Spranger) や教員養成を含む「ある特定の職業に対する実践的な準備教育 (praktische Vorbildung)」⁽²¹⁾ は、大学において行われるべきではないと述べたパウルゼン (Friedrich Paulsen) の考え方とその根底に流れる新人文主義的な学問観、すなわち「ただ知るためだけに学問をする」という姿勢を保持し、そこで得た知識体系の使用法は考えないという、いかにもベルリン的な学問の論理 - その根底的な学問観においては相違するものの、新カント学派のナトルプ (Paul Natorp) もまた、教員養成に対する考え方という点では、はからずともシュプランガーやパウルゼンに同調していた⁽²²⁾ - について多少は知っている。もちろん現代の我が国の大学においても、これがそのまま適用可能であり、またそうあるべきだとまでは、さすがに考えない。しかし教育学研究者が、教育学の役割を一般的かつ観念的な人間形成論の次元において大学用の学問としてではなく、ただ (通俗的な意味で) プラクティカルな次元において (いわば) 師範学校用の教職教養とし

てばかり構想するのならば、それは、教育学を取り巻く外的諸勢力、例えば行政的な決定とその執行に対して、あまりにも無批判的な態度であり、教育学それ自体とその自由及び自律性、教育学に内在する独自の研究の論理、教育学そのものの理念と観念、これらに対して、一種の背信行為を犯すことでさえあるとは言えるであろう。このような筆者の考え方に対しては、いまだに古典的な学者養成機関、或いは「教養コース」(Gelehrtenkurs)の観点からのみ大学院を考えるアナクロニズムに終始しているとの批判が十分に予想される。しかし「両極性」(Polarität)の原理を強く意識していたことで知られる教育学者のノール(Herman Nohl)が、「私がすべての教育的生の弁証法に直面し、ときに断固として一つの側面に立つ場合、それは全く意識的になされる」⁽²³⁾と述べて、時代状況の特殊性や制約等によって軽視されてしまっている視点を一般的な問題意識の中に再びもたらそうとする意図に従って、思慮に欠ける人々からは、あまりにも一面的強調に過ぎると受け取られかねない主張をあえて行っていったように、筆者もまた、バランスのとれた議論の回復が要請されるべきだと言いたいだけである⁽²⁴⁾。

注

- (1) 佐藤学 「学校を問うパースペクティブ - 学びの共同体へ」 『カリキュラムの批評 公共性の再構築へ』 世織書房 1996年 pp. 135-136.
- (2) 同上 p. 136.
- (3) 同上 p. 137.
- (4) 福田誠治 『競争しても学力行き止まり イギリス教育の失敗とフィンランドの成功』 朝日新聞社 2007年 pp. 189-224.
- (5) 岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄編 『分数ができない大学生 21世紀の日本が危ない』 東洋経済新報社 1999年
- (6) Wiggins, G./McTighe, J. (2005). Understanding by Design (Expanded 2nd ed.). Alexandria, VA: ASCD, pp. 17-21.
- (7) Archbald, D. A./Newmann, F. M. (1988). Beyond Standardized Testing: Authentic Academic Achievement in the Secondary School. Reston, VA: NASSP.
- (8) Wiggins, G. (1998). Educative Assessment: Designing Assessments to Inform and Improve Performance. San Francisco: Jossey-Bass, p. 24.
- (9) 北原琢也編著 『「特色ある学校づくり」とカリキュラム・マネジメント 京都市立衣笠中学校の教育改革』 三学出版 2006年 pp. iv-v.
- (10) この本は、2009年度前期(金曜日5・6限)に筆者が担当した教育文化学部学校教育課程の専門選択科目「教育方法学」(2年次配当、2単位)で、テキストとして使用された。
- (11) Gagné, R. M./Wager, W. W./Golas, K. C./Keller, J. M. (2005). Principles of Instructional Design (5th ed.). Belmont, CA: Wadsworth, Cengage Learning, pp. 264-289.
- (12) Dick, W./Carey, L./Carey, J. O. (2008). The Systematic Design of Instruction (7th ed.). Upper Saddle River, NJ: Pearson Education, p. 138.
- (13) 鈴木克明著 『教材設計マニュアル 独学を支援するために』 北大路書房 2002年 p. 17.
- (14) 同上 p. 62.
- (15) 島宗理著 『インストラクショナルデザイン - 教師のためのルールブック -』 米田出版 2004年 pp. 26-27.
- (16) 峯明秀 「思考支援型単元プラン作成による授業設計力の育成 - 選択科目『社会科教育実践論』の展開 -」 『教科教育学論集』第6号 大阪教育大学教科教育学研究会2007年3月 p. 45.

- (17) ルソー著 今野一雄訳 『エミール (上)』 岩波書店 1962年 p. 18.
- (18) 潮木守一著 『ドイツ近代科学を支えた官僚 影の文部大臣アルトホーフ』 中央公論社 1993年 pp. 128-136.
- (19) Spranger, E., Das Wesen der deutschen Universität, in: E. Spranger/W. Sachs (Hrsg.), Eduard Spranger Gesammelte Schriften, Bd. 10.: Hochschule und Gesellschaft, Heidelberg: Quelle & Meyer Verlag, 1973, S. 114.
チャールズ・E. マクレランド 望田幸男監訳 『近代ドイツの専門職 - 官吏・弁護士・医師・聖職者・教師・技術者 - 』 晃洋書房 1993年 pp. 268-278. 参照
- (20) Spranger, E., Wandlungen im Wesen der Universität seit 100 Jahren, Leipzig: Ernst Wiegandt Verlagsbuchhandlung (Verlagsabteilung der Buchhandlung Alfred Lorentz), 1913, S. 20f.
- (21) Paulsen, F., Lehrstühle für Pädagogik (Monatschrift für höhere Schule, Juni 1906), in: F. Paulsen/E. Spranger (Hrsg.), Gesammelte Pädagogische Abhandlungen, Stuttgart/Berlin: J. G. Cotta'sche Buchhandlung Nachfolger, 1912, S. 459.
- (22) Natorp, P., Volk und Schule Preußens vor hundert Jahren und heute: Festrede gehalten auf der Deutschen Lehrerversammlung zu Dortmund, Pfingsten 1908, Gießen: Verlag von Alfred Töpelmann (vormals J. Ricker), 1908, S. 26f.
- (23) Nohl, H., Vorwort, in: H. Nohl, Jugendwohlfahrt: Sozialpädagogische Vorträge, Leipzig: Quelle & Meyer, 1921, S. .
- (24) 助川晃洋 「大学教員に求められる教授能力をめぐる若干の随想 - 問題状況の把握とささやかな提案 - 」 2008年度後期「学校改善とカリキュラムマネジメント」レポート集 2009年2月 pp. 53-58. (未公刊)